高畑誠一さんの想い出

神鋼顧問　岩武照彦

私がはじめて高畑さんにお目にかかったのは、神戸製鋼所に入社し、大阪市今橋の日商本社に御挨拶に上った時であった。当時は、たしか永井幸太郎さんと同じ部屋で、机を並べて居られたと思う。永井さんは、戦後商工省の外局たる貿易庁長官をして居られたので、お互いに顔見知りの間柄であり、ヤアヤアと挨拶の後、高畑さんに紹介された。すると、英字紙を読んで居られた高畑さんは顔をあげて、「君、チタンというすばらしい金属があるようだ。今後伸びると思うから、研究しておこうではないか」と言われた。それに対して永井さんは、「神戸製鋼でもたしかやって居ますよ」と、答えられたと記憶する。私は当時入社忽々のことだから、会社の高砂工場でチタン精錬をやっているなんて、知っている筈がない。否、チタンという名前を聞いたのも、これが始めてであった。其後会社の人に聞いて、やっとこの金属のすぐれた性質が判かり、また高尾研究所長（当時）以下の努力で、高砂工場で電気精錬に成功し、わが国のパイオニアになったことを、了解した次第である。高畑さんが、常に情報に留意し、いい着眼をされることは、この一例でも十分に肯ける。

何時だったか、城山三郎氏が鈴木商店のことを扱った『鼎』という題の企業小説を発行されたが、その中に若き日の高畑さんが登場される。第一次大戦中に若冠三〇才になるかならぬかの高畑さんは、鈴木商店ロンドン支店長として、世界の貿易商を向うに回わして、獅子奮迅の活躍される。例の有名な「三井、三菱を圧倒するか、然らざるも彼等と並んで天下を三分するか」という、金子直吉氏の丈余の手紙もこの頃の話だし、高畑さんは「カイゼルを商売人にしたような人間だ」との評をとったとも言われている。私が高畑さんの経歴を知ったのも、実は城山氏のこの小説なのだ。

現代の若い経済史学者桂芳男氏（神戸大学助教授）によれば、鈴木商店こそは現代の総合商社のはしりだとのこと。たしかに第一次大戦前後の鈴木商店は、緻密かつ俊敏な金子直吉氏の統率の下に、外国貿易の外、製鋼、製粉、製油、製糖、海運、化学繊維と手当り次第に事業を創始或いは継承して、経営の手を伸ばして行った。それはまさに、当時の財閥的コンチェルンの一種、今日の総合商社のはしりであった。そして高畑さんは、その外 国貿易部門の輝ける代表選手であったのだ。不幸にして鈴木商店は台銀事件のため崩壊したが、高畑さんの胸中にはありし日の鈴木商店の雄大な夢、世界を股にかけた大商社の抱負が疼いていたに違いない。その理想が、六十年間に亘って日商㈱のバックボーンとなり、わが国六大商社の一にまで発展せしめたことと思う。

神戸製鋼に入社した頃、会の名称は忘れたが（摩耶会？）、毎年一回冬のさ中に、日商、帝人と神鋼の古い幹部が集って、摩耶荘で河豚を食べる会があった。これは、昔の鈴木商店の縁の方々を中心として、昔話に花を咲かす懇親会でもあった。新米の私も、神鋼が幹事役だったお蔭で、この会の末席を汚すことが出来た次第。河豚は下関の何とかいう有名な店からの直送、酒は灘の生一本という訳で、食べ放題飲み放題。高畑、浅田、大屋の三長老を中心に、和気靄々と話の花が咲いたが、美食家の高畑さんは、特別にこの会を楽しみにして居られた如く、終始ニコニコと上機嫌で、お流れを頂戴に行くと、新参者の私に滔々と河豚料理の講釈をされたものだった。この会は其後数年間続いたと記憶するが、高畑さんには其都度河豚料理の話を聞かされたようだった。

高畑さんのゴルフの話は、万年ビギナーの私如きが書くのも

僭越の至りだが、しかし私にも懐かしい思い出がある。

この大先輩のお伴をして広野コースを廻りたいとは、かねての念願であった。或る日たまたま運よく、パートナーを探して居られた高畑さんにお会いして、江口章氏（当時、神鋼総務部長）と三人で廻ることが出来た。高畑さんは例の如く、テイラインの横にクラブを立ててデンと構え、パートナーのテイショットをジッと見て居られるので、こちらは腕も竦む思いだ。当時江口氏はハンデイ二四位だったからまだよいが、三〇も怪しい私はビクビクもので、右に左にチョロチョロしたり、例の池越えのショートホールは忽ち池にブチ込んだり、散々の体だった。しかし時折真芯に当ると、ナイスショットと高畑さんの叫ばれる声に、救われたものだった。やっとの事で十八番をホールアウトすると、二人を呼んでスイングのこつを教えられた。曰く、「テイクバックの時は、蕎麦屋の出前持ち宜しく、肩に載せる感じ。ダウンスイングの時は、クラブの根元で睾丸を擦する様にして振り抜くことが肝要」、との御託宣だった。そこで私は茶目気を出して、「でま、女の場合はどうするので？」と質ねた。すると雷が落ちた。「女のことなど、考えなくてよろし」と。

高畑さんには、有名な『ゴルフルール百科全書』という解説書がある。昭和三十六年の出版だから、今はもう古くなったルールだが、凝り性の高畑さんの事だから、疑問の点は、U. S. G. A. やSt. Andrewsに問い合わせ、一二〇回も手紙往復の末、誤無きを期せられたものらしい。私は、どうにかしてこの本を入手したものの、肝心のルールの事は難かしくて判らなかったが、附録の「ゴルフ話の泉」の方が面白く、寝転んで読んだものだった。目次だけ見ても、「ゴルフ球の話」、「ホールインワンの話」に始まって、「一時間で七ラウンドの記録」、「一球二鳥を打つ」、「牛がゴルフボールを食う」など、思わず頁をめくりたくなる項目ばかりだ。「広野コースの来歴と由来」も、今は貴重な歴史的文献だろう。この本は今でも、私の書棚の隅にあり、時折開いて高畑さんを想い出している。

昭和四十三年に高畑さんは、四〇〇頁を超える、英文の著書〝Industrial Japan and Industrial Japanese〟を発刊し、内外の友人に配付された。その〝Preface〟に〝my poor broken English〟とあるが、どうしてどうして、格調の高いクイーンズイングリッシュで、おまけにチャンと脚韻をふんだ自作の英詩まで載っている。内容は言うまでもなく、日本経済の発展と日本人の働き振りを、数字を入れ詳細かつ克明に記された名著だ。とくに〝Conclusion〟の一節に、

Young active industrial nation like Japan can be aggressive, but Japanese must behave themselves by self-restraint. This is my vision of future Japan and the Japanese.

とある。今日の事態を顧みて、まことに感慨なきを得ない。

それにしても近頃のアメリカ企業みたいに、自らは日本の市場調査も売込み努力も十分にしないで、政府の赤字減少対策に便乗して、徒らに門戸開放のみを叫ぶのを、元気な時代の高畑さんが見られたら、何と言われるだろうか。かって自ら第一線の切込み隊長だった経験が滲んでいるこの本の、爪の垢でも煎じて飲ませたいものだ。ともかくこの本を見て感激した私は、某誌に「七十翁の英文著書」という題で雑文を書き、そのコピーを高畑さんに送ったところ、丁重な礼状を頂いた。高畑さんのサインのあるこの本は、大事に蔵ってあるが、手紙の方は惜しい事に何處かへ失くしてしまった。

晩年病気が回復してからの高畑さんは、もうコースに出られることもなく、時たま六甲コースで練習ボールを打って居られたようだ。何時だったか、偶然一番のテイグランドで軽く打って居られたのを、脇の小経でしばらく拝見したことがあった。一〇〇個位打たれた球は、さすがにあまり横に外れることもなく、病後とはいえ、往年の名手にしては、淋しい姿だった—これが、私が最後にお会いした高畑さんだった（終）。